

# 持続可能な森林経営のための取り組みを紹介する遊歩道設置

対馬 俊之

## はじめに

最近「持続可能な森林経営」という言葉をよく聞きます。1992年の国連環境開発会議で採択された「森林に関する原則声明」によると、「現在および将来の世代の社会的、経済的、生態学的、文化的、精神的な人類の必要を満たすために森林資源および林地を経営管理すること」とされています。そのキーワードはいくつかありますが、資源の保続と公益的機能の発揮を図る従来の森林経営に次のエッセンスを加える必要があるのではないのでしょうか。

- ・豊かな生態系や生物の多様性の保全に考慮した森林経営
- ・森林の取り扱いについての情報公開とそれについての住民合意

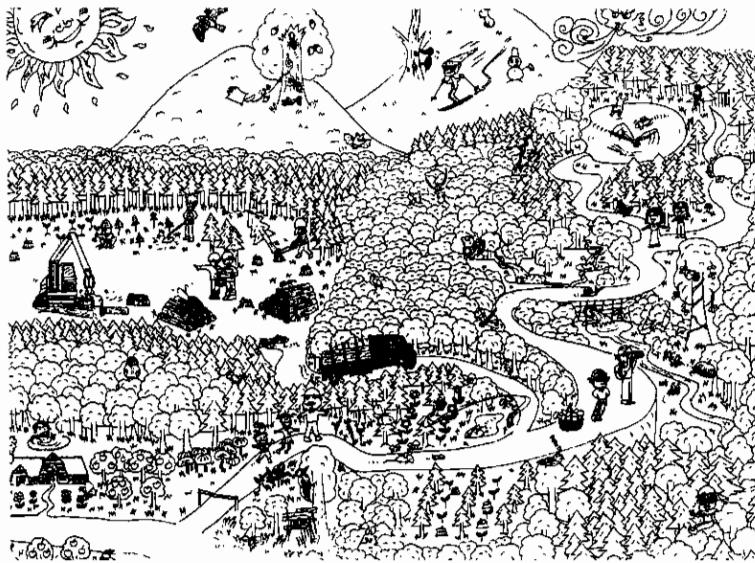


図-1 林業と環境保全や多面的利用との調和のイメージ

これからは、森林に対し木材生産以外の多面的な利用、とくに生物の多様性や生態的な豊かさが、今以上に求められてきます。そして私たち林業関係者には、林業と環境保全との調和の具体例を、一般の方々が実際に見て理解できる形で提供することが必要になるでしょう（図-1）。合意形成には「わかりやすく目に見える形」が必要です。そこで持続可能な森林経営の取り組みを紹介するための遊歩道（通称、多様性の小路）を作ってみました。

## 遊歩道の所在地

平成8年度から北海道は林野庁の委託事業「森林生態系を重視した公共事業の導入手法調査」に取り組んでいます。この事業では北海道版の「持続可能な森林経営」の基準・指標を具体化し、科学的知見に基づいた持続可能な森林経営の実現方法を探るために、石狩・空知森林計画区（森林面積約48万ha）を対象地（モデル森林）としてさまざまなモニタリング調査を行っています。

遊歩道の所在地はモデル森林内の重点調査地区である道有林岩見沢経営区79林班（主に34、35小班）です。かつてトドマツの種子を採取していた母樹林を主体とする天然生針広混交林やカラマツ高齢級人工林など、林相は多様です。さらに遊歩道の付近には、沢がせき止められて出来たと思われるおよそ400mの小さな沼があります。また、旧トドマツ母樹林には0.25haの固定標準地の記録が残っており、過去の成長経過を把握できます。すそ野にはリング園や、サウナを備えたログハウス風の宿泊施設があります。この森林を管理する岩見沢道有林管理センターでは、この恵まれた立地条件を生かし、近郊住民によるレクリエーションの場として活用する計画があります。

### 遊歩道の概要

旧トドマツ母樹林と小さな沼を含む天然林内に遊歩道を設置しました(図 2)。延長は約400mです。刈払機により下草やササを刈り払っただけで構造物は一切ない単純なものですから、毎年の刈り払いは必要ですが、利用が終われば自然に帰るというメリットもあります。また、この小路は道有林管理センターが設置した木材チップスを敷いた歩道と合流します。

この遊歩道の目的は、森林生態系の健全性に配慮して森林を適切に利用する実例を一般の方々に分かりやすい形で示すことです。そのような豊かな森づくりに不可欠と思われる保全すべき対象物を次の①～③の3つとし、説明用の看板を設置しました。また、それらの保全と森林資源の保続が両立可能なことを示すため、母樹林では過去の施業経過を説明しました。

### 保全対象物の例

#### ①老齡樹、大木(写真-1)

樹洞のある大きな木には林業的な価値はあまりありませんが、鳥の営巣木や昆虫等の棲み家を提供します。とくに、この付近でたまに見られるクマガラにとっては欠かせない生息場所でもあります。また、レクリエーションの観点からも、大きな木は理屈抜きで魅力的です。

#### ②倒木、枯損木(写真-2)

これらは菌類や森林昆虫の生息場所、稚樹の更新場所としても重要です。また、幹の途中で折れた枯損木などは、キツツキなどの鳥類に採餌場所として利用されます。これまでただの邪魔物だったり、場合によっては見苦しいとの理由で切られていまし

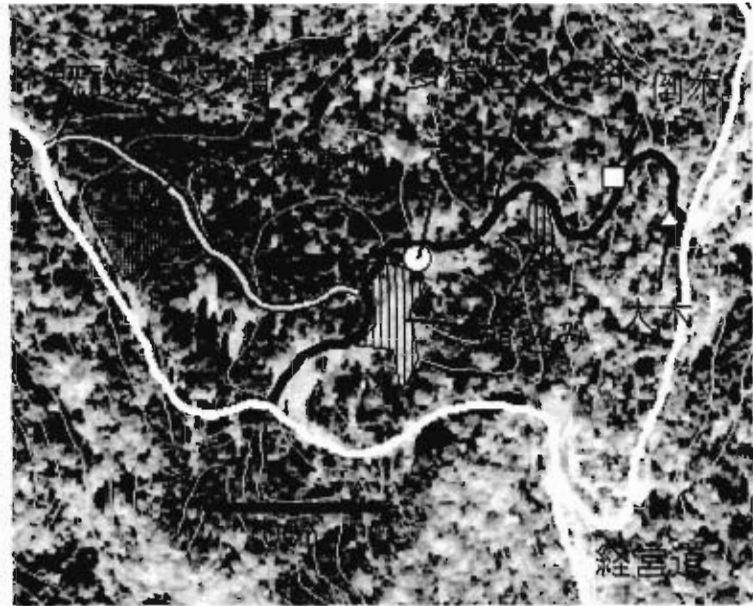


図-2 遊歩道の平面図



写真-1 老齡樹、大木の例(小路沿いのシナノキ)と看板



写真-2 倒木、枯損木の例



写真-3 沢や沼などの水辺（遊歩道沿いの沼）

たが、作業者や訪問者の安全を脅かさない限り、保全すべき対象物の一つとして今後は考慮すべきでしょう。

### ③ 沢や沼などの水辺（写真-3）

水辺は多様な生物の生息場所を提供します。遊歩道の目玉とも言えるこの沼では、エゾサンショウウオをはじめ、少なくとも4種類のゲンゴロウとマツモムシ、多数のヤゴが生息し、周囲にはたくさんのエゾシカの足跡、コウモリや沼を泳ぐヘビも観察できました。このような沼は生物の多様性を維持する上で大変貴重なものです。初夏には蚊の大軍に悩まされますが。

### 施業経過説明の例

旧トドマツ母樹林では1969年から成長量の調査が行われており、1997年に再測するまでの間に、2回にわたりトドマツの収穫が行われました（表-1）。28年間の総成長量はhaあたり283m<sup>3</sup>であり、平均で年間10m<sup>3</sup>成長していることがわかります。現在はhaあたり蓄積354m<sup>3</sup>、本数500本であり、かつて母樹林であったことから周りの林分に比べ比較的資源が残っています。また、資源の保続を図る観点からトドマツの植え込みも行われており、遊歩道にはそれらの経過を示す看板を設置しています。今後は、若い林分や二次林についても、植え付けや下刈りなどの施業履歴をわかりやすく説明した看板などが必要と考えています。

表-1 固定標準地の28年間の成長

年	ha当たり蓄積(本数)	備考
1969期首	242m <sup>3</sup> (476本)	蓄積の96%がトドマツ
1976収穫量	81m <sup>3</sup> (92本)	トドマツのみ収穫
1991収穫量	90m <sup>3</sup> (60本)	トドマツのみ収穫
1997期末	354m <sup>3</sup> (500本)	蓄積の92%がトドマツ
総成長量	283m <sup>3</sup>	
連年成長量	10.1m <sup>3</sup> /年	

#### おわりに

現状では、説明担当者が見学者を引率して看板にしたがって解説するかたちになりますが、道路の修繕など安全面での条件が整えば、より開かれたセルフガイド方式の利用もありうると思っています。今は試行段階で課題も多いですが、岩見沢道有林管理センターと協力して特に次の点を検討して遊歩道を充実させたいと考えています。

- ・都市住民や小中学生などを対象とした公開と意見集約
- ・保全すべき対象物の追加とその妥当性の検証
- ・アクセスのための林道と案内板の整備
- ・他の試験林との組み合わせによる内容の拡充

より多くの方々に森林と林業に興味を持ってもらうためには、林業サイドからのわかりやすい情報と具体事例を提供する努力が必要です。こうした遊歩道はその一つの手段として効果的だと考えます。

(資源解析科)